

作動する思索---メルロ＝ポンティにおける哲学とその外部---

佐藤勇一

哲学とその外部（心理学やキリスト教や芸術等）は、長い間、分離した体制の下でやってきたが、メルロ＝ポンティは、探求する精神のもとでは、すべての思惟形式は互いに連関していることを示した。メルロ＝ポンティは、哲学以外のテキストの解釈を通じて、哲学史を「詩作」として解釈し、それに思索者として参加していた。本稿の目的は、そうしたメルロ＝ポンティの「作動する思索」を明らかにすることである。

第I部では、メルロ＝ポンティが心理学について語りながら哲学史の刷新をはかっていたことについて論じる。そのために、我々は「手がかり」という語に注目した。これは、もともと精神盲の患者の言葉として、ゲシュタルト心理学者の本で紹介されたものであるが、メルロ＝ポンティはそれを自らの術語として獲得している。そして、この語を用いて、古典的哲学を批判し、さらに、ゲシュタルト理論の不十分さを指摘している。ここでは、メルロ＝ポンティが、心理学を通じて古典的哲学の知覚論を捉え直し、さらに現象学へと進むという「新たな道」を歩んだことを明らかにする。

第II部では、哲学とキリスト教の関係を扱う。メルロ＝ポンティは、両者の関係が平和な共存であった17世紀と異なり、20世紀におけるそれらの関係は「新しい軋轢」だと主張する。しかし、それでも彼は17世紀の伝統をその軋轢のただ中で、別の形で受け継ごうとしていた。我々はこうしたことを、彼のベルクソン論から検証する。また、メルロ＝ポンティは、古典的哲学の神の中に、世界を「未完の作品」とみなし、前望的歴史や知覚された世界について語る余地を残している神を見出していたことを確認する。

第III部では、メルロ＝ポンティが仕事上の画家や作家に現代の哲学者の姿を見ていたことを検討する。ここでは次のようなことを論じる。彼が絵画の歴史について語っている時、創造的な哲学の歴史について語っていること。古典絵画の遠近法とセザンヌのデフォルマシオンの違いは、知覚や哲学に関する古典的な考え方と新たな考え方の違いと見なされていたこと。また、世界や歴史や先行する作品をそのモチーフに結晶化してさらなる探求を開かんとする画家の仕事から、メルロ＝ポンティが哲学史について考察したこと、などである。また、ここでは、ヴァレリーやプルーストの仕事から、言語や理念について新たな考え方を示していることについても論じる。